

えふみじんじゃ おおはらはっさくおどり

江文神社

# 大原八朔踊

京都市登録無形民俗文化財

ハつの町で  
継ぐ踊り

**大**原八朔踊は大原の八つの町の総氏神である江文神社で行われます。豊作への感謝であると同時に男女の交流の場であった八朔踊は、昔は男性のみが踊っていました。今では女性も参加するようになり、イベントでは女性と子どもの踊りも行われます。

氏子は大原の八つの町、それぞれの名前が書かれている高張提灯を掲げ、伊勢音頭を歌いながら石段を登ります。石段には灯籠が並んでおり、足下が灯りで照らされ幻想的です。境内へは「寄せ歌」であるショングガイナを歌いながら入っていきます。参拝後は本殿前にある櫓を中心にして笠を被った各町の宮座の青年たちが集まり、「道念音頭(念仏踊り)」という楽器を使わない音頭の高らかに響き渡る歌とともに、円になって踊ります。

昔は八つの町ごとに歌っていたそうですが、今ではいくつかの町が組になって歌い、歌と踊りは途切れる事なく続きます。年を重ねた方も若い人も同じように踊りの輪に入り、一体感を生み出しています。



## 大原八朔踊とは

八朔とは旧暦の8月朔日のこと。田の実節供ともいい、農家では豊作を祈って稻の穂出しや穂掛けを行います。八朔踊りは元々その日に踊るものだったようです。

大原ではかつて八つの町にそれぞれ独自の音頭が伝承されていましたが、今では音頭をとれる人が減少するとともに音頭そのものが失われ、井出町に「都名所」、草生町に「愛宕八景」、野村町に「紅葉名所」、上野町に「大原名所」が伝えられています。今では、音頭を持つ町と持たない町が組になり二つの町で一曲を披露しています。

祭事 info

9/1に近い土曜日 夜 20:00 ~

京都市左京区大原野村町 643

京都バス(10・16・17・18・19系統)「戸寺」徒歩17分

あきもとじんじゃ やせしゃめんちおどり

## 秋元神社

# 八瀬赦免地踊り

京都市登録無形民俗文化財

静寂なる境内に  
ゆれる灯

八瀬赦免地踊りの中心が「切り子燈籠」であることから別名「燈籠まつり」とも呼ばれています。「切り子燈籠」とは、立方体の角を切り落とした形の燈籠の枠に、長い紙を垂れ下げたものです。燈籠の12面の絵は、吉祥文様や花鳥図、武者絵などが赤和紙で精巧に透かし彫りされており、中には、数ヶ月かけて作られるものもあります。この切り子燈籠は高さ70cm、重さが5kgもあり、それを御所染の着物を着て女装した13、14歳の少年8人が被ります。彼らを「燈籠着」と呼び、踊り子の少女たちなども加えて行列を作ります。秋元神社へ到着すると、踊り子の汐汲踊や、燈籠着による燈籠廻しが奉納されます。秋元神社へ向かう道中、切り子燈籠の灯りがゆらゆらと揺れる様はとても幻想的。子どもの晴れ姿を一目見ようとする親御さんや地域の方々も多く、街では見ることのできない光景に思わず引き込まれることでしょう。

11～12歳の女子児童の踊り子は友禅の  
着物に緋縮緼の小袖をからげて着ます。



### 八瀬赦免地踊りの由来

平安時代、八瀬の人々が後醍醐天皇の比叡山御潜幸を無事に守護した功績として、年貢免除などの御輪旨が下されました。

さらに江戸時代中期、比叡山山門と山林結界争いが起こりましたが、時の老中であった秋元但馬守喬知が村人の権利を守る裁定を下しました。この裁定に歓喜した村人は後醍醐天皇の聖業と、秋元但馬守への感謝の念を忘れないように赦免地踊りを奉納しました。このことが踊りの由緒とされており、現在、八瀬郷土文化保存会が継承しています。

#### 祭事 info

10月第2月曜日前日の日曜日

夜 20:00～22:00

京都市左京区八瀬秋元町639（八瀬天満宮社内）  
京都バス（16・17・18・19系統）「ふるさと前」徒歩5分

ゆきじんじゃ くらまのひまつり

# 由岐神社 鞍馬の火祭

京都市登録無形民俗文化財

生まれた時から  
担ぐ伝統の炎

9

40年、由岐大明神が鉢を先頭に御所から鞍馬の地へ移された際、鞍馬の人たちが松明と篝火で迎えたのがはじまりと伝えてられている祭りで、「京都三大奇祭」の一つに数えられています。

多くの見所の中でも最大の見所は、七仲間の行列が鉢を先頭に下から上からと集まり、由岐神社へと至る石段に数十本の大松明が立ち並ぶ瞬間。それらを支える男達やその家族、遠い土地から訪れた観光客総出で「サイレヤ、サイリョウ」の掛け声で盛り上がるその熱気は夜の冷え込みも感じさせません。

全体を見ればその時間は一瞬にすぎませんが、そのときだけは老若男女国籍問わず鞍馬にいる全ての人々が一つになる瞬間と言えます。火祭へ訪れる人々は年々増え、鞍馬や京都の人より他所からくる人の方が多いくらいです。垣根を越えて、心を一つに一参加者として楽しめることがこの祭りの魅力といえるでしょう。



## 鞍馬の心は一子相伝

鞍馬の男子は、覚えていないほど小さな頃から松明を担ぎます。今回お話をうかがった山本さん親子も小さな頃から祭りに触れてきた鞍馬男児で、父親の昌利さんも息子の皓志郎くんも親の背を見ながら祭りの一員となったそうです。

鞍馬の火祭は鞍馬の人々の生活と密接に結びついており、松明の担ぎ方から作り方まで、教える場を設けずとも生まれたときから習慣として自然と受け継がれていくのだと山本さんはおっしゃっていました。

初めて松明を担がせたときは、子ども本人よりも親のほうが喜ぶこともあるのだとか。

インタビュー協力：山本昌利さん 皓志郎くん

祭事 info

10/22

夜 18:00 ~

京都市左京区鞍馬本町 1073

京都バス(32系統)「鞍馬」 鶴山電鉄「鞍馬」徒歩10分

きのあたごじんじゃ えぼしき

# 木野愛宕神社 鳥帽子着

京都市登録無形民俗文化財

一足早い  
成人儀式

**大**人の仲間入りを果たす少年たちの元服式である鳥帽子着が、人々が見守る中、夜に執り行われます。

数え年16歳になった少年たちは、正装である袴を着込み、酒食で人々をもてなす「杯事の饗応」の役を務めます。氏子の中でも祭祀を取り仕切る人々の集まりである「宮座」にて、大人たちにカワラケの盃と肴を配り、そして酒を酌します。その答礼として大人たちは声を合わせ、祝いの謡曲を歌います。

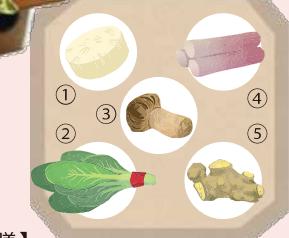
神前には、編んだ藁で赤飯を包む「ゆり膳」、柿・栗・鶏頭・菊などで美しく盛られる「花膳」、季節の野菜を飾る一の膳、二の膳など、合計で30ほどのお供え物が並べられています。

神事がはじまった頃は16歳で成人と考えられており、少し早いようにも思われますが、これで彼らも立派な大人の仲間入り。肅々と流れる時間の中で、大人になる少年たちの緊張感とそれを見守る家族の絆を強く感じることができます。



## お供え物

◀実物の写真



### 【一の膳】

①大根 ②小松菜 ③松茸 ④芋茎 ⑤しょうが  
他にも二の膳、花膳、ゆり膳の計四種類の膳があり、特にゆり膳には力を入れています。



祭事 info

10/23

夜 20:00~22:00

京都市左京区岩倉木野町

京都バス(40・50・52系統)「北稜高校前」徒歩3分  
叡山電鉄「木野」徒歩5分

いわくらじんじゃ いわくられいたいさい

# 石座神社

# 石座例大祭

京都市登録無形民俗文化財

夜空を照らす  
二匹の大蛇

## 石

座例大祭は火祭りのひとつです。神事に使われる大松明は昔、岩倉の地にいたという雌雄の大蛇を模しています。大蛇の悪行に困り果てた村人が石座大明神に退治を祈願したところ、神前の灯火によって見事に退治できたという故事が起源とされています。

深夜、それぞれの町内から松明や剣鉾を手に参加者が石座神社に集まり、午前3時に長さ12mほどの2本の大松明に火が点されます。境内を熱くする炎と夜空に舞い上がる火の粉が人々に神事の始まりを告げます。大松明が燃え尽きる午前5時ごろ、神社から御神輿が出発して夜が明け始めた各町を巡回していきます。さらに午後2時からは昼神事があり、祭り行列が御旅所から出発します。

現在に至るまで300年余り、神前の火を頂いて大松明を点火するという形で喜びと感謝の思いが受け継がれてきています。深夜の寒さや火の熱さを忘れてしまうくらい、炎の大きさと迫力に圧倒されることでしょう。



## 祭りを引き継ぐ

祭りの後継者不足が問題視されている中、この石座例大祭は若い人たちが中心となって祭りを支えています。以前は岩倉地区に元々住んでいる人しか参加できない決まりでしたが、祭りに参加する人々の減少もあって、今日では移り住んできた人たちでも気軽に参加できるようになりました。祭りを活性化し、継承していくためには、このような若者たちが参加しやすい祭りづくりも大切なかもしれません。

### 祭事 info

10/23に近い土曜日

夜 2:30～



※朝神事決行  
昼神事中止

京都市左京区岩倉上蔵町 302

叡山電鉄「岩倉」徒歩18分

京都バス(21・24系統)「岩倉実相院」徒歩2分

はたえだはちまんくう れいさい

# 幡枝八幡宮 例祭

子ども賑わう  
神輿巡行

名

刀・堀川国広を鍛えた湧き水があるとされる幡枝八幡宮の例祭では、大人神輿と子ども神輿が氏子地域を巡行します。また、宵宮祭や御神輿の出発前に、社の前で優美な舞が奉納されます。太鼓の音を合図に御神輿が幡枝八幡宮を出発。「よーさ、よーさ」という掛け声をかけながら、小学生中心の子ども神輿も台車を使わずに担いで進みます。子ども神輿にはありませんが、休憩の度に大人神輿が大きく暴れ、八幡宮に戻ってからもひと暴れする様は、とても見応えがあります。

はつび

法被を着て楽しそうにはしゃいでいる子どもたちの様子に、見ていても思わず笑顔になります。この祭りが地域の祭りとして親しまれていることが伝わってきます。



## 茂山家による狂言

例祭には、狂言の大蔵流・茂山家が1日に3回狂言を奉納します。茂山家が奉納を行うようになったのは、かつてその里子がここで助られたことがきっかけとなっています。普段はなかなか見ることができない狂言をぜひご覧ください。



祭事 info

10/23に近い日曜日 **昼** 11:30~

京都市左京区岩倉幡枝町 1118

京都バス(27・28・45・46系統)「幡枝」徒歩7分  
叡山電鉄「木野」徒歩10分

しんぐうじんじや しらくもいなりじんじや さいれい

# 新宮神社・白雲稻荷神社

## 祭礼

子どもの祭りで  
乙女が舞う

**新** 宮神社と白雲稻荷神社は一緒に祭りが行われております、松ヶ崎の人たちは新宮神社を「西の宮さん」、白雲稻荷神社を「東の宮さん」と呼んでいます。

現在、祭礼は毎年10月の最終日曜日に行われており、八乙女舞や子ども神輿、稚児行列とたくさんの子どもが登場する祭りとなっています。その中で、どちらの神社でも行わられる八乙女舞が見所の一つ。八乙女舞は鉦鉾と扇に分かれており、地元の小学4年生の女の子しか舞うことができません。祭りが近づく10月になると宮司さんがその年の舞手に教えることになっており、子どもたちにとっては一生に一度の記念になります。御神輿も手作りで、子どもたちが懸命にひいて氏子地域を回る様子を大人たちは温かく見守っています。宵宮になると、八乙女舞と舞楽の代表的な左方蘭陵王を舞います。また、縁日もあり、子どもも大人も一緒に楽しむことができます。

### 八乙女とは

八少女・八社女・八姫・八女とも書き、八乙女とは神社に奉仕し、神樂を奏する巫女のことです。数人の少女を総称したものだったとか。なぜ“八”なのかといふと「八は末広がりで縁起がいい」からきているといわれています。

元々は景行天皇の大嘗祭の際に天皇や神々に食事を奉仕した巫女に由來したとされています。

\*1 第12代天皇 やまとたける 日本武尊の父

\*2 天皇が即位の礼のあと、初めて行う新嘗祭



祭事 info

**10月最終日曜日 朝 10:00 ~**

京都市左京区松ヶ崎林山 33 (新宮神社)

市バス(65・北8系統)京都バス(56系統)「松ヶ崎海尻町」徒歩3分  
地下鉄烏丸線「松ヶ崎」徒歩4分

じょうらくどう おおはらうえのちょう おこない・おゆみ

淨樂堂

# 大原上野町 おこない・お弓

京都市登録無形民俗文化財

晴天に放たれる  
清き矢

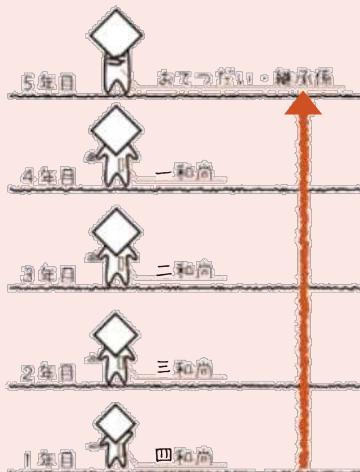
成人の日に、町の氏子の若者たちによって行なわれます。「おこない」とは淨樂堂内にて行われる行事で、「お弓」はあらかじめ作りつけておいた篠竹の的に向かって弓を射っていく行事です。神事の前に町の男性たちは竹を組んだり弓矢を作るなどの準備をし、組んだ竹の下で火を焚き、しめ縄を焚く「どんど」をあげます。

昼に淨樂堂に入り一和尚<sup>ばんじよ</sup>という座の責任者からお酒を受け、お皿に盛られたサイコロ状の大根を竹の箸でつかみ順に転がしていく「サイコロ転がしの儀」を行なった後に「お弓」を行います。お弓は一和尚から四和尚までの4人が順に5本ずつ射っていき、その間、周囲は声をかけながら温かく見守ります。お弓を終えて夕方になると、堂内の壁を内側から竹で叩き邪気を追い出す「悪魔祓い」を行って終了します。

1年間の無病息災を願うため、半分に切った竹をどんどの火で焦げ付かせそれを町中に二本ずつ配る習慣があります。そこからも町の結束がうかがえ、祭りが古くからこの地に根付いているのを感じることができます。



## 和尚とは



和尚には一和尚から四和尚まであり、歳を重ねるごとに数字が若くなっています。

一和尚まで経験した人は翌年以降は参加せず、祭りを伝えしていく側になります。

祭事 info

1月第2月曜日 朝 8:00～

京都市左京区大原上野町 295

京都バス(10・16・17・18・19系統)「野村別れ」徒歩6分

## 特集

# 繋ぐ未来 続く思い

鞍馬の火祭から見る継承と環境

全国的にも世界的にも有名な「鞍馬の火祭」。大小400本を超える松明が街道を練り歩き集まる様子を一目見ようと毎年たくさんの観光客が押しかけます。その歴史は長く、平安時代から現在に至るまで鞍馬の人々によって守られ続けてきました。

### 松明について

若者が担ぐ松明を鞍馬では「甲斐性松明（かいしようまつ）」と呼び、かつては1人で担いでいました。

その名の通り担ぐ男の甲斐性を競うものもありました。中には1人で150kgの松明を担ぐ者もいたとか…。

男性のみ担ぐことが許されているため、鞍馬では男の子が生まれると大変喜ばれました。

### 松明作りに欠かせない「藤蔓」

この松明を結っているのが「藤蔓」と呼ばれる藤の根です。土の中を這っているので探し出すのは至難の技。「それでも、泥まみれになりながらもやるこの藤蔓探しが楽しくて。」と神事世話役の山本昌利さんは語ってくださいました。括る箇所により太さと長さが違うので、それぞれにちょうどよい藤蔓を見つけた時は嬉しいそうです。

取ってきた藤蔓は、両手で絞るようにギュッとねじってさらに柔らかく、扱いやすくします。この作業にもかなりの力が必要。慣れていないと、この作業をしたあとは手が震えて箸が持てなくなるとか。

### いつか、僕も…



山本さんの家系は、松明だけでなく剣鉾を代々差しています。インタビュー中に山本さんの息子の皓志郎くんは、「いつか自分も父のように剣鉾を差したい」と話していました。材料不足などの問題を抱えながらも、こうして次の世代へと「憧れ」も受け継がれているようです。

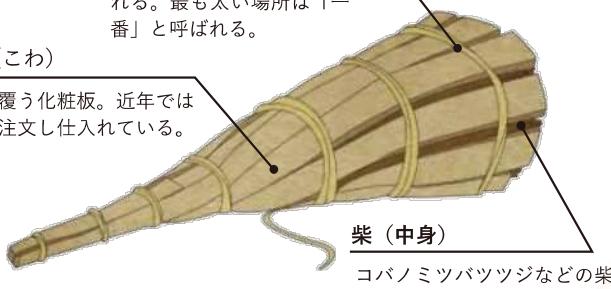
今回インタビューに協力いただいた山本昌利さん(左)皓志郎くん(中)三宅さん(右)

### 藤蔓（ふじづる）

藤の根で、松明を結う材料。五・七・九など奇数で括られる。最も太い場所は「一番」と呼ばれる。

### 木羽（こわ）

松明を覆う化粧板。近年では業者に注文し仕入れている。



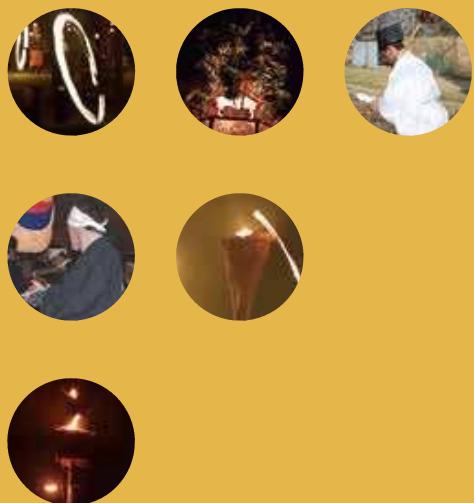
### 増えすぎる鹿による被害

「藤蔓もこの辺りで取るのがなかなか難しくなりました。皆さん苦労されています。やはり鹿の影響でしょうね。」と話す鞍馬火祭保存会の三宅徳彦会長と山本さん。鞍馬でも鹿が増えすぎていることが問題となっています。

せっかく良い蔓が見つかっても、途中で鹿に食われてしまっていて、長さが足りずに使うことができないことも。材料が取れなくなってしまった時のことを聞くと、三宅会長は、「この先どうなるか断定するようなことは言えません。ですが、そういった事態にならないように防鹿ネットを設置するなど、今後考えていく必要があります。」とおっしゃっていました。

豊かな自然が育んだ  
地域

# 北部



この地域の祭りでは「松上げ」という火祭りが有名です。北部だけでも久多宮の町松上げ、広河原松上げ、花脊松上げの3つの松上げが行われています。この3つの松上げですが、地域ごとにそれぞれの特色を見る能够があるので見比べてみるのも一つの楽しみでしょう。他にもここでしか見られない祭りもあります。足を運びにくい場所もありますが、その先には心に焼き付いて離れない祭りが待っていることでしょう。

はなせまつあげ

# 花脊松上げ

京都市登録無形民俗文化財

宙を舞う炎玉

U字状に折れ曲がるカーブが連続する花脊峠を抜け、車でしばらく走ると、絶好の松上げ場の山村都市交流の森に到着します。松上げは火伏せの神を祀る愛宕神社への信仰から来ており、お盆の送り火と結びついたと考えられている柱松行事の一つです。

当日の夜、参加者は公民館に各自の家で作った「上げ松」と呼ばれる松明を持参して集まります。集落にある春日神社で火をもらい、松上げ場の中心にある燈籠木の周辺に立てられた約1000本の地松に火を灯していきます。その様子は幻想的で、火の数が増えていくにつれ、見ている側の気持ちもぐんぐん高まっていきます。

松上げは至ってシンプルな、けれど高度な技術を要するお祭りです。上げ松を回し遠心力をつけて、地上から20mの燈籠木の先端にあるカサに向かって投げ上げます。カサに上げ松が乗り、火が入るまで繰り返します。じっと見守る時間が続いた後、ポッとカサに火が灯った瞬間、松上げ場には歓声がどっと沸き上ります。参加者と見物者が一体となり、花脊八幡町に受け継がれた「まつりの火」がその場にいたひとりひとりに灯された瞬間でもあります。



## 柱松の取り替え



1985年から30年カサを支え続けた柱松

2016年、30年ぶりに柱松が取り替えられました。前年の秋にふさわしいヒノキを選び、伐採して松上げ場に運ぶ大仕事でした。柱松を支える「枠」も2008年に新調されており、後世にもこの祭りを伝えようという八幡町の人々の気持ちが伝わります。祭りを行うには地元の方々の熱い気持ちが必要なのです。

祭事 info

8/15 夜

20:00～春日社神事  
20:45～移動（公民館～トロギバ）

延期

京都市左京区花脊八幡町（山村都市交流の森前）

京都バス(32系統)「花脊交流の森前」下車すぐ

くたみやのちょうまつあげ

# 久多宮の町松上げ

京都市登録無形民俗文化財

闇夜を裂く  
閃火

松

上げとは、火を灯した松明を20mにも及ぶ柱松(燈籠木)の上につけた逆三角形のカゴへと投げ入れる神事です。街へ出た若い男たちはこの日のために久多の集落へ帰り、燈籠木の先にカゴをつけ、垂直に立てて神事の準備をし、夜に燈籠木に火を灯す一番乗りを競い合います。

山に囲まれ闇に包まれた松上げ場に、男たちの投げる松明の放物線はひときわ明るく光り、見物人を引きこみます。燈籠木にはなかなか火が灯りませんが、その分、灯った瞬間はそこにいる全ての人が「おお！」と感嘆の声をあげるほどの盛り上がりを見せます。

大きく燃え盛った燈籠木は男たちの手により倒され、火の粉が尾を引き荒々しく飛び散る様子は久多の人々の活気を表しているかのようで圧巻。炎が小さくなると、久多には元の夜の静けさが戻ってきます。

こんな風に投げます



勢いよく柱松へと投げ入れます。  
(イラストはイメージです。)



祭事 info

8/23

夜 20:00 ~



京都市左京区久多宮の町内

左京区役所(国道367号経由)車で約1時間